

名 称	大阪府ボランティア・市民活動センター
所 在 地	〒542-0065 大阪府大阪府中央区中寺1-1-54
連 絡 先	TEL : 06-6762-9631 FAX : 06-6762-9679 URL : http://www.osakafusyakyō.or.jp/vcenter/vcenter.html

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 大阪府全域（大阪市・堺市除く） 約5,340,000人

本府は、近畿県内の中心部に位置し、府内を3分割するような形で淀川、大和川が流れ、北部は北摂山地、西部は生駒山地や金剛山地、そして南部は和泉山地に囲まれ、東部は大阪湾を臨み、山と海の自然が豊かな都市である。

国道1号線と2号線、放射線状に延びた阪神高速道路、JR・私鉄各線が交わる交通の要所であり、大阪中心部には企業が集中し、郊外には住みよい環境から宅地の開発も進んでいる。古くからの住民と転入してきた新住民が混在しているが、各地区の住民の地域福祉活動は活発であり、高齢者や子育て家庭への支援活動、教育への関心も高く、地域の子どもたちは地域が育て、故郷を愛する健やかな心を持つ人づくりを目指している。

事業の名称、活動概要

名称 ボランティア体験プログラム

各地域でのボランティア活動への参加を促すためのきっかけづくりをする事業として、大阪府内全域（大阪市・堺市除く）を対象に標記事業を行っている。活動概要は、各市町村の社会福祉施設等と連携を図りながら、子どもたちに体験活動や現地学習など様々な触れ合いの場を提供し、この体験機会をきっかけにして、福祉に対する関心を抱き、地域福祉について子どもたちが自ら考えることを目的としている。

事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

近年、地域福祉に関する課題がますます多様化、複雑化する中で、課題解決に向けた取り組みを進めるためには、地域の連携・協働が必要であり、地域住民が自分自身の課題と

してとらえ、まずは福祉の現状を学ぶことから始めた。

また、社会福祉施設では、「地域に開かれた施設運営」という観点で、場の提供を進めた。

そこで、標記事業の実施に当たっては、社会福祉協議会が中心となり、学校とも連携をしながら呼び掛け、生徒と教員のボランティア活動への参加を通して、地域の福祉力の向上を目指すこととした。

事業の内容

① 事前準備として行った取組（企画段階）

プログラム実施に当たっては、府内市町村社会福祉協議会・ボランティアセンターを通じて、体験プログラム事業に参加（プログラムを提供）していただける施設および団体を募集し、冊子にまとめ、各市町村社会福祉協議会・ボランティアセンターに配布した。

市町村によっては、小中学校に体験プログラムについての広報を行い、生徒からの参加を呼びかけた。

また、教育委員会と連携をしながら、小中学校教諭にも参加をしてもらうことにした。

② 活動の展開内容（活動段階）

市町村社会福祉協議会・ボランティアセンターにおいて、参加申込のあった生徒・学生に希望する活動日及び活動団体（場所）との調整（コーディネート）を行った。

参加者の概要は次のとおり。

○生徒・学生

地域の保育所に参加を希望する者が多く、参加者は保育士の日々の業務に付き添うことにより、活動の内容・方法等を学び、更には子どもと直接触れ合うことにより、保育の大切さを学習した。中には、赤ちゃんを抱いて、「実際に赤ちゃんを抱けてよかった」という声も聞かれた。

他に、高齢者施設や障害者施設へ参加した者からは「お年寄りからいろいろなことが学べた」、「いろんな方と触れ合えて楽しかった」という声が寄せられた。

○小中学校教員

教育委員会と市町村社会福祉協議会・ボランティアセンターが連携を取りながら行った活動に参加した教員は、高齢者施設や障害者施設での活動に参加した。高齢者施設では、実際に学校で行っている授業を高齢者施設で行い、「昔を思い出して懐かしかった」と言われた。参加した教員からは「人生の先輩に逆に教えてもらった」という感想が寄せられた。また、障害者施設での活動は、障害者と一緒に体を動かしたり、施設内の活

動と一緒に参加することによって、施設職員から「車椅子ではとても動きづらいことが体験できたのではないか」と言われたりした。教師が地域の社会福祉施設での活動に参加することをコーディネートしたことで、日常的に学校と施設とが行き来できる関係構築の一翼を担うことができた。

③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

市町村社会福祉協議会・ボランティアセンターがコーディネートし、学校と施設・地域との連携を図りながら、地域の福祉について考える場を提供することができ、お互いの情報を共有することができた。また、体験がより効果的に行えるようにするためには、送り出す側と、受け入れ側との事前オリエンテーションがポイントとなることから、パンフレット内容の充実や、受け入れ方法について、施設側コーディネーターの助言を受けたり情報交換会を行うなどの工夫をした。

ボランティアや利用者の安全面については、大阪府ボランティア・市民活動センターがボランティア保険料を負担し、安心して活動ができるよう環境整備を行った。

事業の成果と今後の課題

成果として、地域の人材を活用することにより、より多くの方々に地域福祉に関心を持ってもらい、福祉について考えてもらうきっかけの場を提供することができた。また、学校と社会福祉施設が地域の方たちの拠り所となり、地域全体で福祉について考えていこうとする意識が醸成された。

今後は、体験プログラム事業に参加をされた方々に対して、活動後に地域での日常的な活動につなげてもらうためのアフターフォローの充実が必要であると考えている。

これらの課題解決のため、市町村社会福祉協議会・ボランティアセンターや、参加をしていただく社会福祉施設（団体）、学校等にも積極的に働きかけ、連携の強化を図る必要があると考えている。



高齢者疑似体験



障害者介助体験



障害者疑似体験

執筆者職・氏名：大阪府ボランティア・市民活動センター 主事 村下 佳秀

コーディネーターからの一言コメント

子どもや教員が地域福祉への関心を持つ機会は、各教科等の中で取り上げられる他に総合的な学習の時間の実践的な体験等があり評価を伴うものが多い。福祉協議会・ボランティアセンターが行う事業には、人間性、学び、感動があり、心から福祉を考えるきっかけを与えてくれる。活動の場づくりを、また参加を促す啓発的体験資料の作成に期待したい。

(坂東 侑司)